

わたしたちがめざしている

共同宣教司牧とは

目 次

はじめに	1
1. 共同宣教司牧を支える「交わり」とは	3
2. 「交わり」を実現する手段としての共同宣教司牧	7
3. 共同宣教司牧の受け皿としての「地区共同宣教司牧委員会」	12
4. 「派遣 (Missio)」としての共同宣教司牧と「三部門」の関わり	14
5. チーム・ミニストリーの担い手の養成を考える	17
おわりに	20

はじめに

最近、横浜教区では「交わり」、「共同宣教司牧」あるいは「三部門」といった言葉が当たり前のように使われています。これらはいずれも横浜教区がこれから進むべき道を示す重要な考え方を示しているのですが、実際は、その意味が十分に理解されていない現状も見受けられます。

横浜教区がめざす教会の姿は「交わり」という言葉に集約されます。それは梅村司教が教区長に就任して間もなく発表した司牧書簡のタイトルを『交わりとしての教会をめざして』（2000年）としたことから分かります。しかし、ここでいう「交わり」は理想的な教会の姿を示しているだけではなく、教会がキリストから託された使命をよりよく果たすために手段として必要なものでもあります。つまり、わたしたちキリスト信者同士の交わりがあつてこそ、教会は本来の使命を全うできるのです。いわゆる「共同宣教司牧」や「三部門」はこのような考え方から出発するものであり、「交わり」が実現する場、あるいは手段と理解することができます。

横浜教区では共同宣教司牧を実践する場として地区における各小教区間のつながりが重視されています。具体的には16地区にそれぞれ「地区共同宣教司牧委員会」が2007年に組織

され、2017年で10年目を迎えました。この節目の年に合わせ、更なる共同宣教司牧の推進のため横浜教区内に『共同（協働）宣教司牧推進チーム』が2016年に立ち上がりました。本書は、同チームが、共同宣教司牧とは何かという問いに答えるとともに、それが実際に行われる場としての地区共同宣教司牧委員会の位置づけや、三部門について分かりやすくまとめたものです。是非、今後の共同宣教司牧の推進のためにお役立てください。

2018年7月1日

共同（協働）宣教司牧推進チーム

1. 共同宣教司牧を支える「交わり」とは

交わりである教会

「時は満ち、神の国は近づいた。悔い改めて福音を信じなさい」
(マルコ 1 : 15)

マルコ福音書によると、イエスは「神の国は近づいた」と述べて、ご自分の活動を始められたとあります。「神の国」はイエスの教え、あるいは宣教そのものを要約するような言葉で、わたしたちがめざすべき教会や社会のあり方を現わしています。その具体的な姿は、イエスご自身の言葉や行いの中から読み取ることができますが、大切なポイントは、それが神を中心にした世界であり、神の意志がこの世において実現するという点です。「神の国」の実現のためにイエスは使命を帯びてこの世に来られ、その一生をささげました。その使命は、例えば「主の霊がわたしの上におられる。貧しい人に福音を告げ知らせるために、主がわたしに油を注がれたからである。主がわたしを遣わされたのは、捕らわれている人に解放を、目の見えない人に視力の回復を告げ、圧迫されている人を自由にし、主の恵みの年を告げるためである」(ルカ 4 : 18-19) という言葉から読み取ることができますし、そこには何よりも、すべての人を分け隔てなく愛しておられる神のいつくしみが

浮かびあがってきます。したがって、「神の国」は神の愛がわたしたちのあいだに広がっていくことを意味しています。さて、イエスはご自分が受けた使命を、その弟子たちに伝えました。当然、初代の教会は「神の国」を実現するために、自らの使命を自覚していましたし、それは現在のわたしたちの教会にも引き継がれています。イエスによって始まった「神の国」は、今もイエスを中心としたわたしたち一人ひとりが与えられた使命を果たすことによって成長し、完成に向かっていきます。

洗礼を受けたキリスト信者は等しく、神のもとにある住民、すなわち「神の民」と呼ばれ、この場合、信徒、修道者、司祭というような区別はありません。したがって、実際には教会に様々な職務としての区別はあっても、洗礼を受けたものという点ではすべてのキリスト信者が等しく同じ使命を受け、「神の国」の実現のために働きます。また、その際に大切なことは、わたしたちがそれぞれバラバラに働くのではなく、同じ目的のためにいっしょに働く（協働する）ということです。イエスは言います。「父よ、あなたがわたしの内におられ、わたしがあなたの内にいるように、すべての人を一つにしてください。」（ヨハネ17：21）わたしたちが一つになって働くことで、すべての人を分け隔てなく愛する神の愛を実現するというわたしたちの使命はより明確に、そして確実に実現して

いきます。したがって、「神の民」である教会の本質は一つになって働くこと、すなわち「交わり」ということになります。

さまざまな「交わり」によって構成される教会

教会が「交わり」であることを示すために、たびたびそれは一つの「からだ」にたとえられます。「一つの霊によって、わたしたちは、ユダヤ人であろうとギリシア人であろうと、奴隷であろうと自由な身分の者であろうと、皆一つの体となるために洗礼を受け、皆一つの霊をのませてもらったのです。」(Iコリント12:13)とあるように、教会において、人種、国籍、社会的地位、性別による不平等はまったくありません。一方で、一つの「からだ」として、また、「神の国」を実現するための役割はそれぞれ違います。だからこそ、わたしたちにはいつもいっしょに働くという意識が必要とされていますし、「一つの部分が苦しめば、すべての部分が共に苦しみ、一つの部分が尊ばれば、すべての部分が共に喜ぶ」(Iコリント12:26)ことが大切になってきます。

実際、教会にはさまざまな違いが存在します。多くの人々は信徒と呼ばれ、普段は普通の生活を送りながら信仰生活を送り教会のメンバーとしての役割を果たします。また、特別な約束を交わすことによって一般の人たちとは違う生活様式

をとる修道者と言われる人々もいます。そして、職務上の違いから、ある人たちは他の人たちのために叙階の秘跡を受け、特別な奉仕の使命を与えられています。洗礼を受けたすべての教会のメンバーはこの信徒・修道者・司祭の三つの身分のいずれかに属することになります。

また、世界の教会という観点から見れば、独自の伝統や典礼を保つ教会が存在していますし、それぞれの国にいくつかの教区が存在し、さらに多くの小教区があります。わたしたちはどこかの小さな共同体に属しながらも、世界中に広がる一つの教会のメンバーであり、同じ「神の国」の実現のために働く「部分」であることを意識することが大事になります。そして、全体の交わりのために、小さな一つひとつの共同体が協力し、いっしょに働くことが求められています。

2. 「交わり」を実現する手段としての共同宣教司牧

聖職者中心主義、小教区中心主義からの脱却

最近、「共同宣教司牧」という言葉をよく聞きます。とても分かりにくい言葉かもしれませんが。簡単に言うと、これまで述べてきたとおり、わたしたち一人ひとりが同じ「神の民」として、イエス様から与えられた使命をいっしょに果たしていくことを意味しています。さらに言えば、このような共同宣教司牧を実践していくためには、神の民である教会が一つの信仰によって結ばれた信仰共同体であり、共に歩み、共に信仰を生きていくことが必要です。つまり、自分だけの狭い考えの中に閉じこもってしまうような個人主義的信仰ではない共同体的な信仰を育てていくことが求められているのです。

これまでの教会はどちらかというと聖職者、特に小教区の主任司祭を中心に物事が進められ、宣教し、司牧にあたるのは主に司祭の役割とされ、信徒はそれを助ける、あるいは協力する存在として認識されてきました。いわゆる聖職者中心主義ともいうべき教会のあり方は、長い歴史を通してそれぞれの場で定着し、わたしたちの心の中に根強く残っています。

共同宣教司牧では、すべての人が信徒・修道者・司祭という枠を超えて、洗礼を受けた一人の「神の民」として責任を

もって、基本的な使命を果たすために共同（協働）していくよう招かれています。同時に、大切なことは共同宣教司牧が一つの小教区を超えて行われることです。複数の小教区が協力しながらいっしょに考え、いっしょに歩いていくところに、教会の本質である「交わり」はより豊かに実現していきます。ひとりの司祭ではなく、複数の司祭が、修道者、信徒とともに、それぞれの奉仕職（ミニステリウム）を協働して果たしていくという意味での、チーム・ミニストリーが「共同宣教司牧」では求められています。

キリスト者一人ひとりが神から与えられた三つの使命

これまで、「神の民」すなわちわたしたち一人ひとりのキリスト信者が与えられた使命は「神の国」のために働くこと、神の愛といつくしみを実現させることにあることを見てきました。しかし、伝統的には、それは三つの具体的な使命に分けられます。すなわち「祈ること」「信仰を伝えること」「愛を証しすること」の三つです。神学的な用語を用いるならば、それぞれ「祭司職」「預言職」「王職」とも言います。これら三つの使命はすべての信者が洗礼と堅信を受けることによって「共通に」与えられるものです。さらに言えば、これらの三つの使命はキリストご自身にその源泉があります。キリス

トこそが唯一の祭司・預言者・王としてご自分の使命を全うされました。わたしたちは洗礼と堅信によって、このキリストの使命に結ばれるものとなるのです。

「祈ること」(祭司職)

「あなたがた自身も生きた石として用いられ、霊的な家に造り上げられるようにしなさい。そして聖なる祭司となって神に喜ばれる霊的ないけにえを、イエス・キリストを通して献げなさい。」(Iペトロ2:5)

イエスは様々な場面で山に登り父なる神に祈りを捧げています。祈りによって神と対話し、願いをささげることはイエスの基本的な生活には欠かせないものでした。また、「祈ること」という言葉のニュアンスには、自らをささげるという意味もあります。イエスはその生涯をとおして自分をささげものとしてささげ、それは十字架の上で究極の形で見ることができます。わたしたちキリスト者も祈りの中で神を礼拝し、対話し、願いをささげるとともに、キリストと心を合わせて自らをささげる生き方をもって「祈ること」が求められています。

「信仰を伝えること」(預言職)

キリストは、生活のあかしとことばの力をもって「神の国」を告げ知らせました。そして、そこに弱い人間が生きていくための「良い知らせ」と希望が含まれています。わたしたちキリスト者は、他の人を通して自分に伝えられたものをまた別の他の人に伝えることによって、「神の国」に貢献することができます。そのため、聖書の言葉や教会の教えをよりよく理解するよう努力し、その恵みを神に祈り求めることも大事でしょう。

また、「神の国は近づいた。悔い改めて(回心して)福音を信じなさい」という言葉には、「神の国」とわたしたちの「回心」が同時に語られています。旧約聖書においては神が預言者を通して、人々に警告を与える場面がありますが、「信仰を伝えること」が預言職とも言われることを考えると、わたしたちは自身の回心とともに、ある時には、社会の中に存在する悪や不正に対して声を上げることが求められこともあります。

「愛を証しすること」(王職)

この使命は、「王」としてのイエスの姿に生きることです。イエスの「王」としての姿は、「あなたがたの中でいちば

ん偉い人は、いちばん若い者のようになり、上に立つ人は、仕える者のようにになりなさい。」(ルカ22:26)とあるように、他の人より低くなり、仕える姿の中にあります。また、旧約聖書において王の任務とは、自分の王国において神の掟を実行し、正義と善を行い、悪を退け、搾取するものを懲らしめ、みなしご、やもめ、寄留者などの弱者を保護し、神の慈しみを実行すること(参考 エレミヤ書22:1-3)でした。これはまさに「神の国」の具体的な姿であり、わたしたちも生活の中で、具体的な行動をもって神の愛を証しすることが求められています。

3. 共同宣教司牧の受け皿としての

「地区共同宣教司牧委員会」

キリスト者の生活する地域性や現実に根差した共同宣教司牧

横浜教区は4県（神奈川県、静岡県、長野県、山梨県）が16地区に区分されています。それぞれの地区には豊かな風土と歴史があり、地域性も多様です。都市部もあれば田園地帯もあり、沿岸部もあれば山岳部もあります。また、それぞれの地域には外国にルーツを持つカトリック信者も数多く移住しており、教会の多様性を彩っています。共同宣教司牧、すなわち、信徒・修道者・司祭が協働してキリスト者としての使命を果たしていくとき、それぞれの地区においてそのあり方はおのずと違ってきます。そのため、各地区に設置されている「地区共同宣教司牧委員会」は、その地域に根差した独自のヴィジョンを掲げ、地区の信仰共同体に対する司牧および地域の人々への福音宣教をさらに豊かにするために重要な役割を担っているとと言えます。

地区共同宣教司牧委員会と各小教区の関わり

－ミサから始まる交わり－

地区共同宣教司牧委員会は、その地区の信徒・修道者・司

祭が互いに協力して共同宣教司牧にあたるために設置されています。また、それは小教区だけでなく、修道院やカトリック諸施設も同じように協力することを含みます。それでも、地区における共同宣教司牧の核となるのは地区に所属する各小教区です。小教区で日曜日毎に教会生活の中心であるミサが行われ、全ての信者は一致の秘跡とも言われる聖体の秘跡にあずかります。「パンは一つだから、わたしたちは大勢でも一つの体です。皆が一つのパンを食べるからです」(Iコリント10:17)。地区共同宣教司牧委員会の活動が実り豊かなものになっていくとき、その土台は、聖体によって表わされているキリストとの交わり、そしてキリスト信者同士の交わりであると言えます。換言すれば、わたしたちが自分の小教区を超えて他の教会の人たちと協働するとき、あるいは信徒・修道者・司祭の枠を超えて協力するとき、自らの小教区、特にミサにおいて養われた交わりが広がっていくような感覚が大切にされる必要があります。

4. 「派遣 (Missio)」としての共同宣教司牧と 「三部門」の関わり

キリストからの「派遣 (Missio)」の重要性

共同宣教司牧という観点でミサを語る時、もう一つの重要な点は、それがキリストからの「派遣 (Missio)」を意味するということです。これまで述べてきたとおり、洗礼を受け「神の民」とされたキリスト者は、本質的にキリストからの使命「(Missio)」を帯びたものと理解できますが、キリストが弟子たちを遣わす際に語った「行きなさい。わたしはあなたがたを遣わす」(ルカ10:3)という言葉は、わたしたち一人ひとりに向けられたものであり、ミサの結びの祝福と派遣はまさに同じ意味合いを持っています。共同宣教司牧の土台には、聖体の秘跡で受けた恵みを共に分かち合い、教会の扉のところで止まってしまうのではなく、キリストによって「派遣 (Missio)」され、多くの人に神の愛を届ける使命「(Missio)」を果たすことも心に留めることが大切でしょう。

神から与えられた三つの使命と「三部門」

各地区における地区共同宣教司牧委員会では「祈る力を育てる部門」、「信仰を伝える力を育てる部門」、「神の愛を証し

する力を育てる部門」が設置されるように求められており、多くの地区でこの「三部門」を軸に共同宣教司牧が行われています。この三部門の働きはキリストからの「派遣」を具体化していくための三本の柱と理解することができますが、2章で触れられているように、すべてのキリスト者が、それぞれ一人ひとりに洗礼と堅信を通して託された使命としての「祭司職」、「預言職」、「王職」を有していることに対応しています。したがって、小教区でも共同宣教司牧においても、あるいは個人のレベルにおいても、「祈ること」、「信仰を伝えること」、「愛を証しすること」がバランスよく行われているかどうかは、自らのキリスト者としての歩みを振り返るための一つの尺度と言えます。

キリスト者の養成を担当する「三部門」

「三部門」というと、どうしても「祈ること」、「信仰を伝えること」、「愛を証しすること」を具体化するための活動部門と理解されがちですが、教会の様々な活動や奉仕職に携わる信徒・修道者・司祭の「生涯養成」を担当する機関としての性格もあります。それはそれぞれの部門の名称が「・・・力を育てる部門」となっていることから明らかです。各地区における「三部門」が具体的な活動計画を決め、実施するこ

とももちろん大切ですが、同時に、適切な養成プログラムを実施することを通して、一人ひとりが洗礼によって神から託されている使命について理解を深め、「神の民」の一員として協力できるよう働きかけることも大切です。

5. チーム・ミニストリーの担い手の養成を考える

先に触れたように、共同宣教司牧では信徒・修道者・司祭が教会における奉仕職を協働して果たしてしていくためのチーム・ミニストリーが求められています。また、共同宣教司牧においてキリスト者それぞれが養成されることが不可欠な要素であることも指摘しました。横浜教区ではチーム・ミニストリーの担い手とも言うべき信者の養成が様々な場で行われ、既に多くの実りを得ています。例えば、「共同宣教司牧サポートチーム神奈川」では様々な養成講座が開設され、入門講座を担当する指導者やヘルパーの養成、聖書の分ち合いのリーダー養成、また、典礼の様々な奉仕に関する養成などが行われています。また、教区の各委員会が主催する研修会や講座でもさまざまな養成が行われています。典礼委員会では様々なテーマで定期的に研修会を開催していますし、信仰教育委員会や青少年委員会では教会学校や中高生などのリーダーを対象に研修を行ったりしています。また、委員会が主催するその他の行事などでも、様々な学びの場が提供されています。これらの養成プログラムの目的は、参加者が自らのスキルを身に着けることよりも、それぞれが学んだことを生かしながら小教区や地区におけるチーム・ミニストリーに貢献する人材を

育てることに主眼を置いています。そして、このような養成は、それぞれの地区共同宣教司牧委員会の主導のもと、独自のヴィジョンや地域の特性などを考慮にいれながら、各地区の三部門の中で行われることが望まれています。

各地区における養成の困難さ

各地区においてチーム・ミニストリーを実現するためには、養成に関わる人材を増やし育てていかなければなりません。しかしながら、多くの地区でその人材が不足しています。これは教区懇談会などの際に教区宣教司牧評議会が行うアンケートなどを見ても明らかです。地区の共同宣教司牧を活性化するための良いアイデアが非常に多くあるのに対し、それを実現するための人材が少ないという意見が多く見受けられます。また、上記の講座や研修会などのほとんどは神奈川県で開催されており、共同宣教司牧に関わる養成の機会がほとんどない地区もあります。このような地区では物理的な制約に加え、経済的な負担も大きな問題です。このような問題を解決するために、サポートチーム神奈川で開設されている講座や典礼委員会主催の研修会などが静岡県、長野県、山梨県で行われることもあります。また、まだ十分とは言えません。いずれにしても、これからは地区や県を超えた交わりや協力が必要であ

ることは言うまでもありません。既に、いくつかの地区で研修会や青少年の行事などが合同で開催されていますし、2017年10月に開催された教区懇談会では「地区を超えた交わりをめざして」というテーマのもと、小教区で解決できない問題は地区で、地区で解決できない問題は地区を超えて解決していくことが確認されています。

おわりに

ここまで、教会における「交わり」の重要性、また交わりが実現する場としての「共同宣教司牧」あるいは「三部門」について説明してきました。小教区にしても地区にしても自己完結するのではなく、キリストによって派遣され、多くの人に神の愛を届ける使命を果たすために、常に外に向かって「交わり」を広げていくことが大切です。ましてや地域社会に無関心であってはならないし、身近で苦しみや痛みを抱えている人たちから目を背けてはならないのは言うまでもありません。

横浜教区に地区共同宣教司牧委員会が設置されてから10年が経ちました。わたしたちがそれぞれの地において共同宣教司牧を次のステップに進めるために、既にある取り組みについて検証したり、まだ足りないと思う点を明らかにしたりして、今の共同体の現状を客観的に分析して「自己点検」を行うことをお勧めします。一旦立ち止まってこれまでの共同宣教司牧の歩みを振り返り、共同体の置かれている現実を知ることは、次に進むべき道をより明確に示してくれるでしょう。例えば、小教区や地区で行われる典礼奉仕が極限られた人たちだけで行われているような状況であれば、なるべく多くの人が奉仕に関与できるように信徒を養成する必要があります。また堅

信式をする際に受堅者あるいは準備に関わるリーダーなどが極端に少ないような状況があれば、複数の小教区あるいは地区が合同で式を開催することもできます。信仰養成についても、教会学校のあり方やその中身の見直し、あるいは大人の信徒の生涯養成講座の設置などを考えることも出来ます。

自らの小教区や地区の現状を改めて検証した結果、共同宣教司牧を推進していくための「力」の無さを、特に他の共同体との比較の中で感じることもあるかもしれません。しかし、それぞれの地域には教会の成り立ちやメンバー構成、歴史などには多様性があり、求められていることの優先課題はおのずと違いますし、出来ることの範囲もそれぞれ違います。このような多様性の中で、お互いに補完し合いながら、それぞれの小教区や地区が教会という一つの「からだ」を構成する部分として、「一つの部分が苦しめば、すべての部分が共に苦しみ、一つの部分が尊ばれば、すべての部分が共に喜ぶ」(Iコリント12:26) ことができれば、本当の意味での「交わり」が実現することでしょう。

三位の神の愛の交わり

神の民

教会の根源的な姿
洗礼と堅信の秘跡に基づく
すべての信者に共通の使命
祭司職 預言職 王職

キリストの神秘体

教会はキリストを頭とする
一つの「からだ」、わたしたち
はその部分
役割の違い 多様性
職務上の違い 諸教会

交わり

洗礼を受け神の民とされたすべてのキリスト者は与えられた使命を「交わり」の中で協働して果たす
交わりの源泉は聖体の秘跡
キリストとの交わり、キリスト者同士の交わり → 交わりから派遣

具体化

共同宣教司牧

チーム・ミニストリー
信徒・修道者・司祭が教会における使命（奉仕職）を協働して果たす

地区共同宣教司牧委員会

ヴィジョンの策定

地域性や構成メンバーの多様性を考慮 小教区間の協力 優先課題

三部門

すべての信者に託されている三つの使命を実現する場
それぞれの部門における具体的な活動、およびチーム・ミニストリー
に貢献する人材の養成

共同（協働）宣教司牧推進チーム

『共同（協働）宣教司牧推進チーム』は横浜教区の委員会の一つとして、司教教書『共同宣教司牧に向けた新たな宣教司牧評議会と地区共同宣教司牧委員会』の発表をもって各地区に地区共同宣教司牧委員会が組織されてから10年の節目を迎えるにあたり2016年に設置され、発足メンバーとしてミッシェル・ゴーチェ師、浜崎眞実師、濱田壮久師の三名が梅村司教によって任命されました。そして、同チームの主な目的として、1) 共同宣教司牧を推進する上で特に養成の部分で難しさを抱えている神奈川県以外の三県をサポートすること、2) 共同宣教司牧における信徒・修道者・司祭の協働を促進すること、3) 共同宣教司牧についての理解を分かりやすく伝えること等が掲げられました。また、司教から任命された三名の司祭の他に横浜教区の各種委員会、共同宣教司牧サポートチーム神奈川、教区事務局からそれぞれ代表者が選ばれ同チームに協力してきました。今回、発表された文書『わたしたちがめざしている共同宣教司牧とは』は、メンバー全員が約一年以上かけて共同宣教司牧について分かち合いを行い、理解を深めた上で最終的に形にしたものです。今後の小教区および地区における共同宣教司牧のさらなる推進のためにお役立てください。

共同（協働）宣教司牧推進チーム

ミシェル・ゴーチェ

浜崎 眞実

濱田 壮久

古松 真理子（信仰教育委員会）

大木 聡（青少年委員会）

高橋 新平（典礼委員会）

柏木 慶子（難民移住移動者委員会）

内藤 登（福祉委員会）

名執 芳博（教区宣教司牧評議会）

鈴木 真（共同宣教司牧サポートチーム神奈川）

谷脇 慎太郎（教区事務局）